

父になれぬ息子

ムールード・マムリ『忘れられた丘』について

茨木 博史

ムールード・マムリ(Mouloud Mammeri)は1917年、フランスの植民地支配下にあったアルジェリアの大カビリー地方、タウリルト・ミムン(Taourirt-Mimoun)という村で生まれた。アルジェリアの住民の約二割を占めるとされる、ベルベル語系の言語を母語とする人々が暮らす地域である。父はアミンと呼ばれる、村長職にあたる地位にある人物であった。村の小学校に通った後、おじの住むモロッコのラバトとアルジェのリセに通い、さらにパリの名門リセ・ルイール・グランにも学んだ。1939年に勃発した第二次世界大戦にマムリは二度にわたり召集され、学業の中断を余儀なくされるが、戦後になって文学の教授資格を得ると、アルジェリアのメデア、首都アルジェ、モロッコのフェスやラバトのリセでフランス語やラテン語の教師として赴任する。以上のような経歴は、典型的な植民地エリートの姿を浮かび上がらせるが、被植民者の世界において彼のような存在は異例中の異例と言えるものであった。アルジェリアの被植民者の中から、継続的に作品を発表し、それがフランスの左翼知識人などに広く読者を持つような、本格的な作家たちがようやく登場するのは、小説について言えば、ようやく1950年代に入ってからのことである。マムリは同じカビリー地方出身のムールード・フェラウンやモアメド・ディブ、カテブ・ヤシンなどととも、アルジェリア(もしくはマグレブ全体)のフランス語作家の「第一世代」に数え入れられている。彼はアルジェリアの独立以前、1952年と1955年に、それぞれ『忘れられた丘』(*La Colline oubliée*)と『義人の眠り』(*Le Sommeil du juste*)をブロン社から刊行している。本稿では、彼の処女作『忘れられた丘』において、植民地主義と第二次世界大戦という歴史の猛威によって、カビリーの伝統社会が揺るがされる様がどのように描かれているかを見てみたい。

物語はカビリー地方の小さな村に住む、モクランという青年の手記という体裁で始まる。先

回りしてしまうことになるが、この手記はモクランの不幸な事故死によって途絶する運命にある。彼がどのような理由でこれを書き残していたのかは判然としない。時代は第二次世界大戦が勃発して間もなくの時期である。モクランはウアリやアクリ、イディルといった同年代の男友たち、さらに、従姉妹のアアジヤクといった若い女性たちとともに青春の日々を送っている。彼はカビリー社会の伝統に従って、アアジと結婚することが決まっている。クもまた、同じようにしてイブラヒムという男性との結婚がひかえている。一見、静態的な変化のない世界のように思われる村が、少しずつ揺らぎ始める。モクランの従兄弟であるメナクは、密かにアクリの妻であるダヴダに思いを寄せている。カビリーの社会において、不貞は親族間の血みどろの復讐劇を引き起こしかねない禁忌である。やり場のない思いは、メナクを陰鬱にし、周囲の者に対して攻撃的な態度を取らせる。ある晩、モクランは、ダヴダの家から出てきたメナクと道でばったりと出会い、口論になる。

「俺を馬鹿にしているのか、はん？ おまえは他の連中と同じように面白くもなく、品もない幸せにふけるんだろう。おまえはもうじき結婚する。おまえは幸せになって、妻を愛し、彼女もおまえを愛して、それで、おまえらはたと子供を持つんだ」

私は何もしていない、自覚する限りでは。こんな誹謗を浴びるようなことはしていない。私がアアジを娶る、いや、彼女を娶らされるのが、私の過ちだろうか¹。

メナクはモクランに八つ当たりしながら、村で行なわれている伝統的な結婚を非難している。口論なおも続き、メナクはダヴダの家から出てきたのだと、自ら言う。さらに、ダヴダが彼の前で髪を洗ったことをまで明かして、モクランを飛び上がらせる。

「なんだってんだよ！ その何が悪いんだ？ 女は男の前で髪を見せてはいけないとでも？ 彼女は俺の前でそれをやった、だからどうしたんだ？俺は時代遅れの老人じゃない、俺は、そんな慣習を間抜けだと思っているさ。しかも、彼女だってそう言ったぜ²」

対するモクランは「彼女が慣習を間抜けだと思っているって？ おめでたいことだな！」とやり返す。彼の反応が、真っ向からメナクに反発するのではなく、皮肉を口にしてはぐらかす態度であることは、示唆的である。モクラン自身は伝統や慣習に従順な態度を取りながらも、決して心底からの信奉者ではない。伝統に対して反抗を見せるのは、メナクとダヴダだけではない。クの兄であり、高等師範学校に通うメッドゥルはその急先鋒である。彼は「文明」や「進歩」という言葉を村の若者たちに説いて回る³。

村の若者たちの心性は様々である。経済状況も然りで、早くに学校を辞めて「アラブ人のところかフランスへ」働きに出た貧しい者もいる一方で、モクランやメナクの家は裕福である。特に裕福なのはイディルの家で、彼の父は高原の土地で飼っている羊をフランスに輸出することで儲けている。若い登場人物たちの心性や経済状況は、フランスがもたらした学校制度、および、村の外の世界と各々がどのような関係を結んでいるかによって左右されている。植民地主義が山間の小さなカビリーの村をも確かに侵している様が、物語を通じてつぶさに描かれている。エリートのメッドゥルだけでなく、フランス北部の鉱山で働いていたラヴェーは、「ファシスト」という新しい言葉を持ち帰ったりする⁴。村の外の世界との絶えざる交流と緊張関係が、若者たちの自らの生きる共同体を見つめる視線を相対化していると言えよう。

第二次世界大戦の勃発は、カビリーの共同体は激しく動揺させ、新婚のモクランの生活にも暗い影を落とし始める。「戦争がすべての物事の上に重くのしかかり、物事をより浅薄でより悲しいものにしてしまった」⁵。モクランとアアジは、東の間の平和なときを、毎日一緒に畑に出て過ごす。夫が新婚のときに妻と外出することは慣習に反することである。だが、「この戦争が全てを許した」⁶。モクランとアアジの関係も、戦争によって規定されることになるのだ。彼

らの周囲の若者たちも、ある者は動員され、ある者は出稼ぎのために、大挙して村の外へと出ていく。ついにモクランにも動員の命令が下り、彼はアアジとの間に息子を作るという、伝統社会の秩序にとって最も重要な任務を果たせぬまま、妻と別れなければならなくなる。子供ができないままでいることで、アアジは義母から憎まれ、「子供がいなくて女なんてどうしようって言うんだい、息子のいない女なんて」⁷と吐き捨てられる。カビリーの伝統社会において、夫を持たない女性、あるいは結婚しても息子を産めない女性の立場は悲惨である。戦場にいるモクランはアアジの不遇を知りながらも、彼女を救い出すことはできない。父親がついに、村の実力者であるシェイクを通じてアアジを離縁するようにモクランに求めたとき、彼は拒否をする。だが、アアジのほうが伝統社会の圧力に屈して、それを受け容れてしまう。皮肉にも、実母のもとに送り返された後で、アアジが妊娠していることがわかる。彼女からの手紙でそれを伝えられたモクランは、もはや離縁が取り返しのつかぬことに苦しめられる。

手帳に30ページの余白と、女性の名を記したと思われるベルベル語の文字を残して、モクランの手記はここで途絶する。ところが、物語はモクランに変わって、「我々」という主語を使う別の語り手によって続けられる。それによると、メナクやメッドゥルらとともに、休暇でタスガに戻る途中、モクランは狂気にとりつかれるようにして雪原へ一人で迷い出してしまう。そこで彼はアアジの幻影を見て、彼女に抱かれて死ぬ。

ミルドレッド・モルティメールの言うとおり、モクランとアアジ、メナクといった主人公たちの不幸の原因は、年長世代から強制される禁止であり、そこにはマムリのカビリー文化に対する批判がこめられている⁸。もっとも、若者たちに抑圧的に働く伝統社会は、既に見てきたとおり、植民地主義と戦争という、村の外部から来る脅威にさらされている。秩序の継承者たるべき若者たちは、自らの社会に対し

て疑問を吹き込まれ、また、出稼ぎや動員といった、やむにやまれぬ形で容赦なく外へと連れ出される。シャルル・ポンはモクランの死について、カビリーの村とその外部にある植民地主義との、「二つの世界を調和させるためのあらゆる試みが失敗に終わった」結果であり、不幸な形で死ぬことが「唯一の可能な調和」であったのだと述べている⁹。若者たちは村の伝統や慣習を相対化する視線を持っている。だが、新しい秩序を生み出す力は持ち得ていない。モクランの曖昧な従順さを持った態度は、結局のところイモビリスムに陥るほかない。

伝統社会の描写の中で印象的なのは、モクランの父親の影の薄さである。彼には目立つ台詞もほとんどない。モクランはそんな父を次のように見ている。

私の父は何も言わなかった。なぜなら、賢明な者は、感情の動きから自由になっていないときは、男として、眺めるだけにしておくに越したことはないからである。私が結婚して以来、彼は自分と私の間に世代間の隔たり以上に完全な文化の相違があることを感じながら、原則として私の問題に首を突っ込まないようにしていた¹⁰。

秩序の最大の体現者であるべき父は無力である。息子とは「完全な文化の相違がある」とさえ感じている(と息子には見えている)。モクランは自らが父となり親族の秩序を保つことが叶わずに苦しむのだが、彼の実の父も既に継承すべきモデルであることをやめている。たとえ、モクランに子供ができていたとしても、彼は伝統的な父を再生産することはできなかったであろう。伝統を受け継ぐまま失意するのはモクランだけではない。ダヴダとの叶わぬ愛に傷ついたメナクは、モクランをタスガで葬り、最後の口づけを彼女と交わした後、二度と故郷に帰らぬ決意で再び戦場に赴く。

伝統的な共同体の外部に目が開かれた息子と、伝統や秩序を守りきれぬ無力な父の姿は、

マムリの第二作『義人の眠り』において、より苛烈な形で描かれることになる。そこでも、第二次世界大戦が重要な物語の背景となっている。主人公の青年アレズキは、公然とカビリーの伝統や慣習、イスラム教の神さえをも否定して父を憤慨させる。アレズキはフランスの文明に心酔している。父は息子を変えた学校の教師を呪うが、その背景に広がる植民地主義の機構については全く理解が及ばない。村長と同じようなものだと考えて出かけて行った役所で、彼は侮蔑的に扱われて自尊心を傷つけられる。アレズキの父にとって、「それまで諸価値と事物が金属のように堅固であった」世界が、崩れ去ってしまう¹¹。しかし、彼にはそれに抵抗する術はない。

独立以前に発表した二つの小説作品には、マムリの一貫した問題意識の展開が見えるが、紙幅が尽きてしまったので『義人の眠り』の詳細な分析は別の稿としたい。

¹ Mouloud Mammeri, *La Colline oubliée* [1952], Paris, Gallimard, « Folio », 1992, p. 13.

² *Ibid.*, p. 17.

³ *Ibid.*, p. 26.

⁴ *Ibid.*, p. 25-26.

⁵ *Ibid.*, p. 45.

⁶ *Ibid.*, p. 45.

⁷ *Ibid.*, p. 69.

⁸ Mildred Mortimer, *Mouloud Mammeri — écrivain algérien*, Ottawa, Édition Naaman, 1982, p. 18-19.

⁹ Charles Bonn, *La littérature algérienne de langue française et ses lectures*, Ottawa, Éditions Naaman, 1974, p. 33.

¹⁰ Mammeri, *La Colline oubliée*, *op. cit.*, p. 109.

¹¹ Mouloud Mammeri, *Le Sommeil du juste* [1955], Paris, Plon, « 10/18 », 1978, p. 31-32.